

### 3. 日韓の教員養成制度改革に関する研究会

- 日時：平成 23 年 3 月 3 日
- 出席者：高大焮（Ko Dae-Hyuk）教授（韓国・京仁教育大学校）、長澤憲保教授（基礎教育学系）、渡邊隆信准教授（基礎教育学系）、別惣淳二准教授（基礎教育学系）、大関達也講師（基礎教育学系）、龍輪飛鳥特命助教（教員養成スタンダード開発室）、鈴木篤特命助教（教員養成スタンダード開発室）、横山香特命准教授（総合教職キャリアセンター設置準備室）
- 通訳：趙スジンさん（本学在学韓国人留学生）

平成 22 年度の調査研究事業の一環として、韓国の京仁教育大学校から高大焮（Ko Dae-Hyuk）教授を招へいし、日韓の教員養成制度改革に関する研究会を開催した。教員養成スタンダード開発室の鈴木特命助教より、兵庫教育大学における教員養成スタンダード開発の経緯と内容が説明されたあと、高教授の自己紹介と、以下の点についての詳細な説明が行われた。

1. 韓国における教員の文化的地位
2. 初等教員養成の資格基準
3. 京仁教育大学校における教員養成カリキュラム
4. 韓国における教員継続教育制度
5. 韓国における教員養成制度改革についての議論

韓国ではもともと教員の文化的地位は高いが、現在の社会状況もあり、教員を志望する若者も多く、教育大学の学力や地位は高く保たれている。初等教員の養成は、国立の教育大学校など限られた大学で行われているが、一方、中等教員の養成は師範大学および一般大学の教職課程で行われている分、レベルにばらつきがあるという話であった。

韓国では 2000 年以降、教育部（日本の文部科学省にあたる）により、国家水準での初等教員資格の開発が進められ、2005 年には初等教師資格の教育課程における最少基準についての開発研究、つまりいわゆる教員養成スタンダードの開発研究が行われることになった。教員のための新たな資格基準としては、教職に関わる人間性（教職に対する使命感や自負、人間愛など）、教科の知識、学習者の理解、授業と評価能力（授業の設計や運営、改善能力、評価方法の開発など）、学生指導と学級管理、将来の社会に対する対処能力（情報の活用や研究の能力）の各領域における資質や能力が求められる。

京仁教育大学校のカリキュラムは専攻科目と、実習を含む教職科目から成り立っている。各教育大学は、教育部から 2009 年に告示された「教師資格取得のための細部基準」に則ってカリキュラムを編成し、運営している。また、同教育大学ではグローバルな力を身に付けるということで、海外での学習、あるいは国内での国際的なボランティア活動に関わることが重要視されている。

教員の研修に関しては、教育機関（資格・職務・特別の各研修）、学校、および個人での研修の形態があるが、教育機関の特別研修のなかに最近取りこまれたのが、「学習研究年制」研修（New Teacher Training Program, NTTP）である。一定の条件を満たした優秀な教員が、1年間有給で、国内外の希望する教育機関で研修を受けられるということで、競争率も非常に高くなっている。

最後に、韓国における教員養成制度改革についての最近の議論として、教員養成の大学院レベルへの引き上げと、初等教員資格の細分化について挙げられた。

教員養成の大学院レベルへの引き上げに関しては、例えば「6年生」「2+4年生」「4+2年生」などのモデルが提出されており、それぞれのメリットとデメリットが現在議論されている。高教授は「2+4年生」のモデルを推進しており、2年間であれば、学生は自分の教職への適性を熟考したうえで、進路の変更も可能であるというメリットを挙げられていた。

初等教員資格の細分化とは、小学校の高学年ではすでに中学レベルでの教育がされているため、小学校を低・中・高段階に分けて、専門教科の教員による授業を行うべきかどうかについての議論であり、段階化にともなう免許の細分化導入の案が出されているとのことであった。

制度からカリキュラム、資質や能力まで、かなり幅広い説明が高教授によって行われたあと、参加教員との質疑応答が活発に行われた。両国、あるいは両大学において、細かい点における違いはあるにせよ、参加者には、教員養成が根本的に抱える課題は共通であると感じられているようであった。

高教授の専門は道德教育・教育哲学・儒教による教育理論ということであり、『管子』の一節を研究会の最後に述べられた。人を育てる教員という職に就く学生を育てる者の責任の大きさを改めて感じさせられる研究会となった。

一年之計 莫如樹穀  
十年之計 莫如樹木  
終身之計 莫如樹人  
一樹一獲者 穀也  
一樹十獲者 木也  
一樹百獲者 人也（『管子』）